五、鷲見氏と東氏の関係は？

―やまと阿千葉城の鷲見氏―

「濃北一覧」に阿千葉城にいた鷲見貞保を東常慶が滅ぼしたという記事があります。南北朝の時代には共に土岐氏に属して南朝方と戦った鷲見氏と東氏ですが、争いが起こったのです。その出典を捜すと「遠藤記」や「郡上古日記」が出てきます。それにしても濃北一覧は盛りすぎです。天文十年（一五四一）に鉄炮が出てくるのですから。（以下「鷲見家史蹟」より）

『応仁・文明以後、鷲見郷には、鷲見彦六行保が居たのだが、自ら出陣して中央の戦いに加わることは無かったけれども、その子孫は多くの者が戦歴の無い者はなかった。行保に四人の男の子があり伊豫守保照、美作守保重、大学助保兼及び新左衛門保房と言う。（もっといたと書かれている系図もあります）

伊豫守保照は庶子だったせいか家を継がず、又、鷲見城も一城だけでは戦国への備えが不充分だったためか、鷲見郷に入るべき関門である剣村に一城を築いて、ここに居た。永正十一年（一五一四）伊豫守保照が亡くなり、その子の市兵衛貞保の時になって、栗栖城にいた東常慶と争いをして、天文十年六月十八日貞保が遂に剣城で自害した。思うに東氏は、同年越前の朝倉氏と戦い、之を撃退しその余勢をかって鷲見郷の一角を取ったものであろう。「濃北一覧」にその戦いの記録がある。

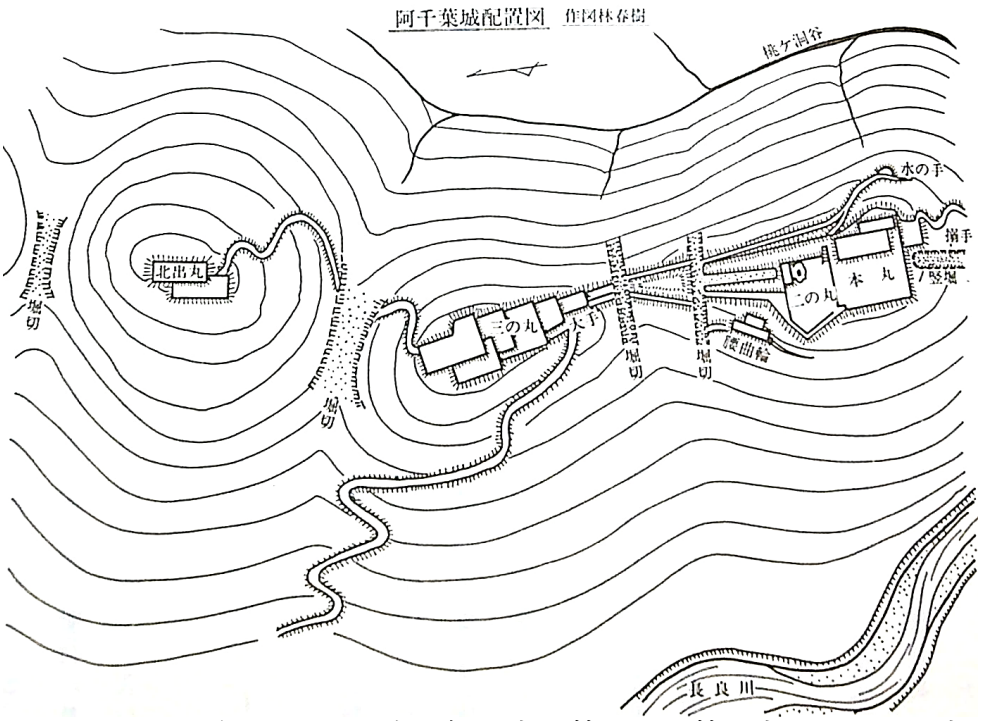
天文十年栗栖篠脇の城主東常慶、剣目城の鷲見市兵衛貞保を攻め滅ぼそうと軍勢を準備したことが鷲見家にもその由、聞き及んだので、手近な者達を集め、相談して軍の兵を用意した。

篠脇の城では早くも出陣を準備し、一番手に餌取肥後、二番手に日置主計助、三番手に松井縫殿助雑兵をたずさえ、剣の宮に陣を構えて八つの陣に備え立てた。城方には鷲見蔵人、川尻備中、森左膳、大将の鷲見貞保、上段、下段と陣を構えて、今か今かと待っていた。

篠脇勢は正面から押し寄せたけれども、城方の者、鉄砲が霰の様で近づけないので、夕方になるのを待って、池戸内記、遠藤唯右衛門、三木三十郎、各務、土屋等城の裏手より攻め寄せた。城兵等は死にものぐるいで防戦し、森左膳は突進して主計と戦い、共に討ち死にし、川尻備中も又、餌取肥後と戦って討死した。こうしている間に、からめ手の軍は城壁に迫って来たので、貞保は幼子の千代丸を老臣の餌取広綱に託して遁れさせ、遂に自害し、鷲見蔵人が介錯して共に自殺した。からめ手から乗り込んだ篠脇勢は城に火をつけたので城兵の大半は討たれ、逃げてしまった。

註として、その後、餌取広綱は千代丸と共に美濃国西牧谷へ落

ち延び、千代丸が成長して後、信長公へ願い出、その時の八幡城主遠藤盛数へ使いを出し、鷲見が難儀をしているのでそちらで養育されるか、こちらで召し抱えるかどうか承りたいと申し出られたらば盛数公は早速、申請されて鷲見千代丸（後の兵助、鷲見正保）を家臣餌取広綱共々に大島村をつかわされた。（大嶋鷲見氏祖）』



この「濃北一覧」の「阿千葉城の戦い」からいろいろな疑問が浮かびます。順番に考えてみましょう。

① この記事はそもそも正しいのでしょうか？

「郡上古日記」の東常慶の所に次のように書いてあります。

『天文の頃、阿千葉鷲見一族御下知に背き、討手として日置主計助、餌取肥後に仰せつけ、鷲見家来森某という者主計助を組討ちつかまつり、然れども肥後を始め味方の侍粉骨を尽くして早速攻め崩し、鷲見一家降参仕り、御旗下に罷り成り。・・・・』

どうやら東常慶は阿千葉城を攻撃したことは間違いないようです。ここで疑問が出てきます。鷲見城の鷲見保兼はなぜ同族の鷲見貞保の加勢をしなかったのかということです。鷲見氏と東氏の全面対決だったら加勢をするはずですが、その後東常慶と鷲見保兼が白川郷の照蓮寺や内ケ島氏を仲介にして、水魚のように仲良くするという起請文を天文十年十二月に出しているのです。これはどうとらえたら良いのでしょうか。

② そもそも鷲見氏がなぜ阿千葉城へ？

さてもう一つ疑問があります。それは鷲見氏はなぜ阿千葉城に来たのかという問題です。そこで昔からの言い伝えを調べてみます。

「大中のかたりべ」に次のように書いてあります。

中津屋に「加賀太郎」という小字の地名があります。これは鷲見加賀丸（忠保の長男太郎論人）のことで、彼の屋敷

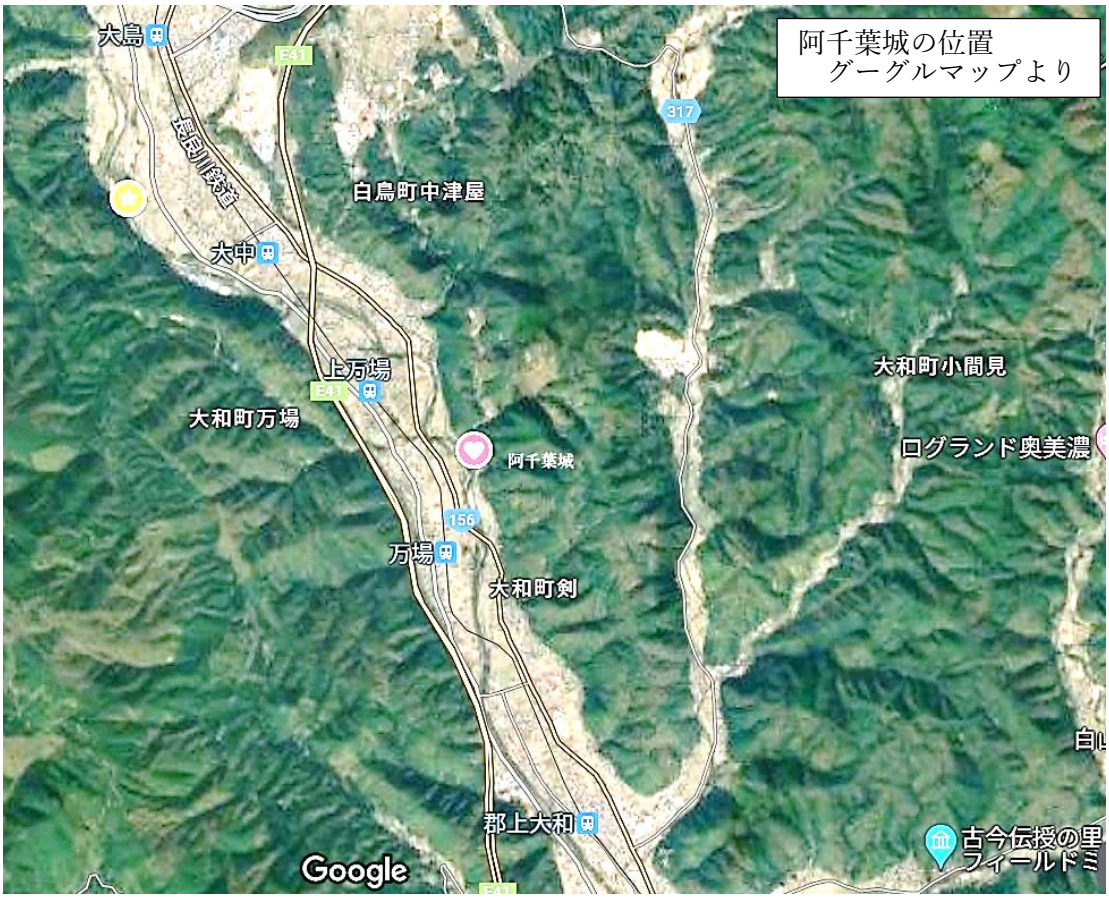
があったというのです。あくまで言い伝えですが、地名に残っていて、加賀丸の晩年出家してその屋敷から櫻野（さくらの）を通って阿千葉城に通ったという話があるのです。くどいですが剣（つるぎ）ではなく中津屋から阿千葉城へ通っていたのです。

中津屋地区小字名

中津屋の小字地図
「大中のかたりべ」
より

③郡上目城とはどこの城？

長善寺文書の三頁に次のことばが載っています。



阿千葉城の位置
グーグルマップより

『　郡上郡**目城**居住之仁者
東下総権守
玉井三郎
鷲見藤三郎　　』

ここに出てくる「目城」はどこの城でしょうか？

A、目城は**阿千葉城**（森弘美文書）または千葉目城、剣目城

B、目城は**鷲見城**（鷲見度保文書）霞の城

いずれも「郡上郡鷲見郷御領 地嗣家譜」より

の二つが考えられます。しかし、最初に東氏が入っていることを考慮すると、A、即ち阿千葉城に自然と落ち着きます。

藤三郎は鷲見忠保ですから、もう彼の時代に阿千葉城に入っていたと思われます。加賀丸はその息子ですから加賀丸が加賀太郎に隠棲したことは十分考えられます。

④鷲見氏は東家に早い段階から人質を出している

伝衛門家の系図を見ると、東家への人質となっているのが加賀丸の息子（弥兵衛）と氏保の息子（餌取八右衛門）がいるし、弥平治は稲葉家の人質になっています。当時人質に出すことは服属したということでした。

⑤なぜ天文一〇年なのか？

越前衆が天文九年に攻めてきたという記録が長龍寺文書の中にあります。山城である二日町城と篠脇城には畝状竪堀群（臼の目堀）があります。畝状竪堀群は北陸に多く、「越前衆」の影響は石徹白を通じて上保にも影響を与えていました。鷲見氏はこの時に、朝倉と何らかの関係があったことも考えられます。

さらに、鷲見氏は一貫して美濃国守護である土岐氏に従ってきました。ところが土岐氏と東氏の関係悪化によって、東氏から攻められたのでしょう。

『鷲見城は、明応三年（一四九四年）六月三十日行保が亡くなって後、三男大学助の保兼が城にいたが、保兼に跡継ぎの子がなく、美作守保重の子、保光が入って城を守った。

天正七年（一五七九年）保光が亡くなり、その子孫の多くは岐阜に出て、斉藤及び織田氏に仕えたので、鷲見城は保照の孫、鷲見兵庫保直が入って居城していた。鷲見兵庫は、遠藤盛数に従い、その子孫も又、遠藤氏に仕えた者が多かった。』

鷲見家史蹟より

『盛数公旗下の侍・・・
牛道穴間：猪俣五平次、
鷲見の郷：鷲見兵庫、
大島村　：鷲見兵助、・・・

胤俊公旗下の侍・・・

大間見郷：鷲見弥平次・・・』　「郡上古日記」より

鷲見氏は阿千葉城で滅んだわけではなく、鷲見郷や大島、大間見、北野に生き残っていたのです。そして、戦国時代には日本各地に散らばります。鳥取、兵庫、岡山、長野、滋賀、千葉、・・・と各地へ、それぞれの来歴を背負いながら。

「中津屋の鷲見氏の五輪塔の墓」
阿千葉城の戦いで亡くなった人の墓だと言われています。中津屋の鷲見太郎左衛門家の方たちが代々守ってこられました。

【参考文献】（サイト「高鷲の古文書」にあります）

・「鷲見家史蹟」（現代語訳版）
・「濃北一覧」　巻七「阿千葉城落城」
・「長善寺文書原文」　従足利将軍感状写　（長善寺文書）
・「郡上古日記」〈郡上東氏・遠藤氏の記録・岐阜県立図書館蔵〉
　九頁と一一頁
・「大中のかたりべ」（加賀太郎）
・「鷲見家系図」（鷲見尚武氏所蔵）「鷲見伝衛門家系図」
・「鷲見氏系図」（森家所蔵）「森家文書鷲見氏系図」
・「郡上郡鷲見郷御領　地嗣家譜」
・「郡上　東氏の歴史と文化」　（高橋教雄著）

東常縁と鷲見氏保と交流があったという文書があります。常縁が氏保の頼みで定家の文書を写したというのです。

『平常縁（花押）この双紙は証本を以て一字違わずこれを書き写す。　左衛門尉**藤原氏保**所望年月を経るものに依るなり。』「老いのくりごと」島津忠夫著より

氏保も和歌の道を求めた武家であったことがわかります。